奥富清先生を偲ぶ

植生学会初代会長の奥富清先生が 2015 年 6 月 26 日に急性心不全のため，ご逝去されました．享年 87 歳でした．

奥富先生は，広島文理大学をご卒業後，福岡教育大学に助手として赴任されたのち，1970 年には東京農工大学農学部に移られ，1992 年に定年退官されるまで教鞭をとられました．この間，東京農工大学では学生部長，農学部長などの要職に就かれました．大学をご退官後も日本自然保護協会理事長，自然保護助成基金理事長としてご活躍され，2007 年には瑞宝中綬章を受章されました．

植生学会との関わりでは，先生は設立準備委員長として，植生学会の設立に際して中心的な役割を担われ，発足した植生学会の初代会長に就任されました．その後，1996 年から 2 期 6 年にわたり会長を務められ，植生学会の礎を築かれました．その功績などにより植生学会功労賞を受賞されております．

研究面では，先生は植生連続体に関する先駆的な研究に取り組まれたのち，留学先のスイス連邦工科大学地植物学研究所で植物社会学を学ばれ，その後は植物社会学の基礎研究と，それに基づく植生の保護・管理に関する応用的な研究をされました．スイスで受けたエーレンベルク教授からの植物社会学の個人講義の話は，「植生情報」の日本植生学クロニクルの特集に先生がご寄稿されていますので（植生情報第 17 号），ご存知の方も多いと思います．ご遺品の整理の折，ご親族の許しを得て拝見したスイス留学時の先生の日記には，植物社会学の手ほどきを受けたエーレンベルク教授とのやり取りが細かく書きとめられていました．さらに，帰国後には植物群落に関する成因生態学の研究を進める決意も記されており，私をはじめとした門下生への先生のご指導のルーツをはじめて知ることになりました．

先生は，原生自然環境地域学術調査隊の隊長として参加された南硫黄島での調査など，伊豆諸島や小笠原諸島での島嶼植生の研究にも精力的に取り組まれました．南硫黄島の登頂調査は恩師の堀川芳雄先生以来であったことを，調査を無事に終了した後に先生が感慨深げにお話されていた姿を思い出します．先生は小笠原諸島世界自然遺産候補地科学委員会の委員長として，世界遺産登録に大きな貢献をされましたが，このとき，小笠原諸島での一連の研究成果が世界遺産登録のための科学的データとして，重要な役割を果たしたことは言うまでもありません．

お気に入りの帽子をかぶられた奥富先生
（写真提供: 奥富良子様）

明治神宮の植生変遷のお仕事が先生の最後の研究となりました．80 歳を過ぎてご体調も万全ではない中での熱意を込められて行われた調査・研究で，40 年前に宮脇昭先生が研究された明治神宮の植生の今の姿を記録し，後世に伝えるご研究でした．先生と宮脇昭先生は東京農工大学の前身，東京高等農林専門学校を同級でご卒業された親友で，明治神宮の植生研究は親友同士が連携して，今後へ向け神宮の森の方向性を示した研究といえます．

先生は，生まれ育った多摩の原風景「武蔵野の雑木林」には特別な思い入れをお持ちで，それまでは植生研究の対象となることが稀であった，二次林などの代償植生を対象とした研究に早くから取り組まれました．私の博士論文となったミズナラ林の研究も，研究室の忘年会で「卒業論文では武蔵野の雑木林の研究をしたい」と申し出たことから始まりました．

私が奥富先生の元で助手として勤めていたある日，隣にあった先生のお部屋からドア越しに顔を出され，「おう，星野くん，僕らみたいな武蔵野の先住民を武蔵野インディアンと呼ぶそうだ」と言われました．私も武蔵野の先住民．いろいろなテーマに手をだして何をしたいのか定まらない私に，インディアンらしく地に足を付けた仕事をしなさいとおっしゃりたかったの

かも知れません.

これまでの先生のご指導に感謝し，先生の目指された植生学の方向性を引き継ぐことをお約束します．心より先生のご冥福をお祈りいたします.

2015 年 10 月

星野　義延